

人間というのは奇妙な生き物である。

知恵を研鑽しながら不合理な行動をしてみたり、あるかも分からない技術を追い求めたり、平和を謳いながら諍いを起こしたり。

自分たちを育んできた自然を切り拓き、より住みやすい場所を求め、その果てに自分たちの住む星そのものを危険に曝している。

加減を知らないのか、先を見据えることを忘れたのか、あるいはこの憂いや嘆きさえも、人々にとっては予測の範疇だったのか。今や緑の星は灰色に囲まれ、自分たちを守るために発展させてきた文明は、自分たちの寿命を刻々と縮めていく。

そんな憂いを口にするこの身も、所詮はその文明に囲われている。推奨はしないが、便利であることは認める。美味しい食事があり、温かな寝床があり、至るところに雨風を凌ぐ場所がある。これほど住みよい場所はない。

とは言うものの、実のところ人の営みにはさほど興味はない。

こちらは生きるために生きているのであり、人間のように何かを為し遂げるために生きる、というのは少し難しい。

今を築き上げてきた人々の研鑽や努力を、評価しないわけではないが、やはり他人事であることに変わりはない。人間ならざるこの身にとっては、どうあっても思慮の外である。

さて、ではこの偉そうな口ぶりのこいつはなんぞや、という疑問は当然だ。

既に使い古された文言ではあるが、この身を的確かつ純然に言い表す台詞が、既に百年以上も前に著されている。なので、ここは敢えて装飾過多な長口舌を振るわず、ただ一言で言い表すことにする。

——吾輩は猫である、と。



「知ってるか？ 郊外にある大きい屋敷の話」

学生にとって束の間の休息となる昼休み。そんな話を振ってきたのは、昼食を共にしていた一也からだ。

「いや、知らないけど」

率直で素気ない回答に「つまんねえな」と返される。

「つまんねえな、って言われてもね。知らないものは知らないんだよ」

「知らないなら知らないの反応があるだろ。……まあいいや。でき、そのお屋敷の話
なんだけど——」

聞いてもいないのに、怪しげなゴシップを延々と話し続けるのは、一也の悪い癖だ。どこで仕入れてきた噂話かは知らないが、根も葉もないのがご愛嬌である。

火のないところになんとやらだが、昔は擦るだけで煙を出す玩具があったそうだ。一也もその類だろう。

「――町のはずれのほうに建ってるんだけど、結構昔からある日本家屋らしいんだ。で、そこにはなんと……無念の死を遂げた男の幽霊がでるんだってさ！」

「……へー」

「反応薄っ！ もう少し驚いてくれよ！」

大げさに嘆く一也だが、その類の噂話をごまんと聞いている。市内某所のトンネルには車より速い老婆の幽霊がいるのだの、学校の屋上から身投げした生徒の霊が夜な夜なグラウンドで走り回っているのだの、まともな話を聞いた試しがない。

今回は今までよりはいくらかオーソドックスな話で攻めてきているが、一也の口を通して聞くと胡散臭くなってしまう。

「なにになに？ 何の話？」

妙な幽霊話に辟易していると、横合いから淫刺とした女性の声が掛けられた。そちらを見やると、髪を短く切ったボーイッシュな少女が立っていた。

「なんだ瑞希か。お前に話すと怖すぎて大変なことになるから話さないでおいでやる。何この俺の優しさ！」

「はいはい、あんたは黙ってて。で、何の話？」

毎回恒例のやり取りを見せられた後、瑞希の視線はこちらに向けられた。

「郊外の屋敷に幽霊が出るんだって。根も葉もないけど」

「根も葉も枝も幹もあるんだよ！ ついでに花も咲いてるんだよ！」

不遇な扱いに混乱したのか、訳の分からない不平を口にする一也。瑞希も大体予想していた内容らしく「あー、またか」と若干投げやりな反応を示した。

「圭介も大変だね、毎回こいつの馬鹿話に付き合わされて」

「今回はちよっとパンチが効いてなかったけど、普段の話なら突拍子がなさ過ぎて面白いよ。トンネルの老婆の幽霊にフェラーリで挑む話は爆笑させてもらった」

一也の話をタネに、俺と瑞希で盛り上がる。この関係もいつも通りだ。

俺と一也和瑞希。小さい頃から一緒に遊んで、どんな時も三人一緒だった。三人で笑えば楽しさも三倍で、三人で泣けば悲しみも三分の一になる。そうして分かち合ってきた時間、その分だけ繋がった絆。それは、これからも続いていく宝だ。

どれだけ時間が経っても、この繋がりだけは大切にしたい。例え、いつか違う道を歩み始める日が来るとしても。

それはさておき、そろそろ馬鹿にしすぎたのか、一也が瑞希と言い合いを始めた。勿論口が滅法弱い一也が結局言い負かされる羽目になるのだが。

その光景を見る度に、俺は何度となく漏らしてきた苦笑を、今日もまた吐き出していた。



空は生憎の雨模様。春休みを間近に控えて、空気も少し暖かくなりつつあるが、日が差していないればまだ肌寒い。

傘を打つリズムミカルな雨音が耳に響く。煙ったような町の中、人気の絶えた住宅街を歩くのは自分だけのようだ。

陰鬱な空も、生憎の雨も、肌を刺す寒気も、感じているのは自分だけ。晴れの日とは違う空気に、ほんの少しだけ気怠くなる。

「……ん？」

ふと、視線の先に違和感を覚える。

塗りたくったような灰色、静止した町の中で、自分以外に動く影が一つ。塀に挟まれた道路の只中に、小さな箱と、そこに仕舞われるかのように放り出された一匹の猫がいた。

その宝石のような目は遙か頭上の空に向けられ、降りしきる雨など気にした風もなく、鳴き声一つあげずに座り込んでいる。

その落ち着いた雰囲気は、猫にはあまり似つかわしくない。あれから、猫じゃらしにじやれつく姿を想像出来ない。

とはいうものの、雨に濡れて震えていることには変わらない。拾って連れて帰ってやりたいが、残念なことに俺の独断だけで決められるほどの権限はない。どうしても両親の許可がいるし、動物嫌いの父がペットなど許すはずもない。

取り敢えず一時だけでも雨を凌いでくれればいいと思いい、鞆の中に仕舞いっぱなしにしていた折りたたみ傘をおいてやる。

遙か曇り空を眺めていた猫の瞳は、突然やってきた見知らぬ俺に向けられた。人間を見る機会が少なかったのだろうか、まるで値踏みするかのように視線を巡らせている。

「ごめんな、家には連れて帰れないんだ。せめて良い人に会えることを祈ってるよ」

言葉がわかっていないとは思うが、言わずにはいられなかった。後ろ髪を引かれる思いで、捨て猫の元を後にする。一度拾われてまた捨てられるよりは、しっかり世話をしてくれる誰かに拾われた方が幸せに違いない。

人通りの少ないこの場所においておくのは、果たしてどう転ぶだろうか。住宅街であるのだから、これから人が通ることは確実だが、果たしてあの猫を拾っていつてくれるだろうか。ならばいつそのこと、反対を受けるのを覚悟で拾って帰った方が良いのだろうか。そんなことを延々と考えていたから、それは正真正銘の不意打ちだった。

「傘を置いて行く優しさは、まあ認めなくてもないがね。出来れば雨風の凌げる場所へ移す

程度の配慮は欲しかったところではあるかな」

妙な違和感に、思わず振り返る。モノクロームの景色と、ノイズのように縦に走る雨粒。人の気配もしなければ、人の姿も皆無である。未だに耳に届くのは、打ち付ける雨の音だけだ。

気のせいだろうか。そんなことを考えていると、再び声が聞こえた。

「どうした若人。話を聞く気があるなら、今少し近くに寄ればよからう」

二度三度、向き直っては振り返り、辺りを隈無く見渡す。やはり人の気配も人の姿もありはしない。にも関わらず聞こえてくる、この声は何者だろう。

貫禄のある低く響く声は、嘎れた弱さはなく、年月を経た、老樹のような印象だ。その声色から察するに力強い老翁であるうが、その姿がどこにもない。

「どこを見ておる。今少し視線を下げんか」

ぴしやりと言い放つ語句の強さに、思わず背筋が伸びる。そして言われるまま視線を下げていく。真っ直ぐ見据えていた視線を、徐々に下げていき、足下を見るか見ないかというところで、先程の声がまた聞こえた。

「良し良し。それでは、そのまま視線を少しずつ左にずらして行き給え」

言われるまま、見下げるような視線をゆつくりと左の方へとずらしていく。徐々にスライドしていく景色、その末に瞳が捉えたのは、雨に濡れる毛玉だった。

「ようやつと視線が合ったな。これで漸く話が出来るというものだ」

雨露を吸い込む毛並みは虎柄。聞こえてくる声には似つかわしくない可愛らしい見た目は、勿論人語を操るには相応しくない真正銘の猫である。

しかし、声に従った先に見える生き物は、残念ながらその猫だけである。他にこの場所には生き物らしい生き物はおらず、ましてや人の影も形もありはしない。

「さて、こんな雨のなか立ち話もなんであろう。残念なことに吾輩には家が無い故、お主の家にも案内してくれぬか？」

今度こそ見てしまった。渋い男声の音に同期する猫の小さな口を。話すかのような動きは、最早言い訳も現実逃避のしようもない。先程からの声は紛うことなく、この捨て猫から発せられていたらしい。

偶にテレビで、喋る猫とやらが出ているが、大抵はただの親馬鹿、もとい飼い主馬鹿である。が、こんなにも流暢に喋っている猫は、未だかつて見たことがない。

「お前、一体何者だ……？」

まさかの未知との遭遇に、そう問わずにはいられなかった。

そして、その質問を聞いた猫は、まるで「待ってました」と言わんばかりに得意げ——猫の表情はよく分からないが——な顔をして、こちらを見据えて口を開いた。

「——吾輩は猫である。名前はトラだ」

「あ、名前はあるんだ」



「ただいまー」

「おかえり。雨、すごかったですよ。濡れてない？」

家に帰って来るなり、母は心配そうに台所から顔を出した。

「大丈夫だよ、心配いらなくて」

雨よりすごい物に遭遇したが、それは口には出さない。軽くタオルで体を拭くと、そのまま階段を上って二階の自室へ行き、すぐさま鍵を閉める。今部屋に入ってからされると非常に不味いのだ。

「さて、と。おーい、入って良いぞー」

雨が入らぬよう少しだけ窓を開き、外に呼びかける。すると、少し間を置いて、先程の猫のトラが部屋の中へ入ってきた。この家では恐らく初めての動物の侵入である。

「あ、ストップストップ。そのまま入るなよ、部屋が水浸しになるだろ」

「心配ご無用。そんな手間は掛けさせぬよ」

そう言いながら窓の隙間から抜けて入ってくるトラ。何のためのタオルだと思っている、と文句の一つも言おうとしたが、その言葉は出てくる前に喉の奥に引っ込んだ。

「……あれ？ 水が滴っていない。っていうか、全然濡れてないじゃん」

入ってきたトラの様子を見て驚いた。先程まで全身ずぶ濡れだったトラの体は、まるでそれが嘘であったかのように乾いている。艶やかな毛並みが、空気を孕んでふわふわとしていて、雨に打たれた様子は微塵もない。

そのまま部屋の真ん中に鎮座するトラ。窓を閉めてからベッドに腰掛け、改めてトラと相対する。

赤茶の毛色と虎柄、大きさはそれほど大きくないが、声色から察するに相当お年を召しているらしい。落ち着いた様子も相まって、貫禄のある出で立ちだ。

どこからどう見ても猫なのだが、納得いかないことが二つほど。

「ところで、猫の癖にどうやって喋ってるんだよ。あと、なんで濡れてないの？」

「質問の多いことだ。まずは名を名乗るのが礼儀であろう。そんな初歩ですら知らぬのか」

「むっ……」

まさか猫に正論を返される日が来るとは思わなかった。そもそも猫に名乗ること自体がまずもって想定できないことである。が、向こうの言には一理あるので、取り敢えずは名乗っておくことにする。

「俺の名前は圭介。特徴は特にないよ。名前は好きに呼んでくれていいから」

「簡素な紹介、感謝しよう。吾輩は先程申した通りトラという。見ても通りの猫だ」

喋っている時点で猫かどうかを疑いたくなる。のだが、それも含めての先程の質問である。早々に答えてもらいたいものである。

「ふむ、何故喋っているか、か。こちらは特に人語を話しているつもりはないが、そちらに言葉として通じておるなら、何かしら理由があるろう。吾輩とお主で何か通ずる物があつたのやも知れん。続いて、何故濡れていないか、だが……ふむ」

そこまで流暢に話しておいて、寸止めもないものだ。

「なんだよ、言いにくいことなのか？」

「いや、言ってしまうのも吾輩は構わないのだが……さて、如何としたものか。まあ、話す猫と応対してこれだけ肝が据わっておれば問題はないか」

そう前置きをして、考えあぐねていた顔は、もう一度こちらに向き直った。

「この身は既にこの世のものではない。数えるのも億劫なものだから年数まで教えてはやれないが、疾うの昔に死んでおるのだ」

死んでいる。それはつまり、この猫は幽霊だと言うことか。

「……いやいやいや。死んでるって、それじゃあなんで見えてるんだよ。俺には霊感とかそんな面白可笑しい物備わってないぞ？」

「それも不思議な物よな。大抵の人間は素通り、誰にも気付いてもらえなんだが、お主は吾輩に気付き、あまつさえ声まで聞こえるという。どのような縁であろうな」

しみじみと語る猫だが、こちらはそれほど穏やかではない。確かに死んでいるなら最初から濡れてもいないだろう。何故あの時は雨が滴っていたのだろうか。

「なに、その方が雰囲気があるろう？ それぐらいの融通は利くようだな」

こちらの質問に、なんでもないように答える猫。随分とご都合主義だが、この際それは置いておく。一々目くじらを立てていては進む話も進まないものだ。

「じゃあ聞くけど、ダンボールに入ってから誰かに拾われるのを待ってた理由は？ 死んでまで誰かに飼われたいとか、そういうことじゃないよな？」

これほど達観した猫であれば、それこそ一人で生きていくだろう。それでも拾ってくれる誰かを捜していたということは、何かしら理由があるはずだ。

死んだ後でさえもあの場所を待っていた理由。何十年前かは知らないが、死んでしまったにも関わらず、成仏もせずにこの世にこだわる理由。そういったものが、無くてはおかしいのだ。

「……未練、或いは贖罪、とでも言うべきか」

落ち着いた雰囲気の、それでも少し上機嫌であったトラは、少し悔いるようにその思いを吐露した。

「吾輩には、飼い主がいた。吾輩を愛してくれた、良き人であった。だが、ちよいと出かけた時に、吾輩は運悪く車に撥ねられてしまった。結局主人に会えぬまま、こうして時を過ごしてきたのだ」

「……その人の家って、どこにあるんだ？」

「それが問題でな。撥ねられた拍子に抜け落ちたのか、死んでしまえばそうなるのかは吾輩にも解りかねるが、吾輩のいた場所が解らなくなってしまったのだ」

そう言っつて、ここにはいない飼い主へ謝っているのか、頭を垂れて萎れるトラ。

犬は人につき猫は家につく、と昔から言うが、どうもこの猫は逆らしい。家のこと、自分の住み処のことはすっかり記憶から抜け落ちてしまっているが、自分を可愛がり、愛してくれた主人のことは、しっかりと覚えていらしい。

不慮の事故の末に命を落としたトラは、死んでしまった後でもこの町を歩き回り、自分の飼い主を捜し回っていたという。そして、いよいよ猫としての限界を感じ、今生きている人間に助力を願うために、ダンボールの中で、自分の姿が見えて、尚かつ協力してくれる人を捜していたのだ、と。

「勝手な申し出で、誠に申し訳ない。だが、もう頼れるのはお主だけだ。ほんの少しで構わぬ。この哀れな身に、どうか一片でも助力を頼みたい」

必死に懇願するトラ。一体どれほどの時間と苦労を重ねてきたのだろうか。主人を捜すということが、どれほど難しいものであったかなど、推し量るのも難しい。

恐らく、この猫が見える人間は希有なはずだ。そこから更に手伝ってくれる人を探すのだから、その苦労たるや、簡単に言い表せるものではないだろう。今回のこれであっても、ただの偶然に過ぎない。そう二度三度もこの猫が見える人間に出会えることもないかも知れない。

出会ったことも縁であれば、こうして家にしたのもなにかの縁だろう。断ることだって出来た。それをしなかったのは、ただ言われるがままに従ったわけではない。

「……わかった。手伝うよ」

そう、言っつてしまえばこれも縁だ。繋がってしまったなら、あとは為すことを為し遂げるだけである。

「……有難う、本当に有難う」

猫が泣くのかはわからないが、少なくとも、トラの心をほんの少しでも救ってやれたのではないか。そんな気がした。



まずは情報を集めなければならぬのだが、如何せんトラの覚えていることが少ない。飼い主が男であったこと。妻子がいて、子どもにも可愛がられていたこと。偶に人を大勢呼んでいたこと。偶に潮の香りがしたこと。今ある情報としてはそんなところだ。

さしあたっては、一番聞きやすい家族に聞くのが一番だ。都合の良いことに、丁度夕飯時で、珍しく父が早く帰宅している。この機会を逃す手はない。

「圭介、遅かったじゃないか。もう夕飯できてるぞ」

リビングに降りたとき、そう声を掛けてきたのは父だった。生まれてこの方町から離れたことのない父だ、もしかしたらあっさりと言えが見つかるとも知れない。

と、不意に父の顔が不機嫌に歪んだ。まるで嫌な臭いを嗅ぐかのように鼻をひくつかせている。まるで警察犬のような仕草の後、父はこちらに向き直った。

「……圭介、まさかとは思いますが、動物でも拾ってきたんじゃないだろうか？ なんだか妙な感じがするぞ」

この親父は化け物か。思わず隣にいたトラと一緒に体がびくつと震えてしまった。

繰り返すが、トラは既に亡くなっていて普通では姿も見えないし声も聞こえない。ましてや鼻で感じるような臭いもあるはずがなく、父の予感ハシックス・センスじみたものがある。

「は、ははっ。そんなことある筈ないじゃないか。父さんの動物嫌いは知ってるんだから」少し辿々しいが否定の言葉を口にする。父も、姿が見えない以上はもう詮索する気もないらしい。

「……ならいいんだがな。動物は良くないぞー、可愛がったって懐きやしない。家の中で我が物顔されるぐらいなら、最初から飼わない方がいい」

そんな所感を口にしながら、食事の席に着く父。

父の動物嫌いは、俺が幼い頃から聞いている。家族のお出かけの定番である動物園にも行ったことはないし、町で散歩中の犬にすれ違うのも嫌うほどだ。

苦手なのではなく、嫌いなのがミソだ、と何時も言っているが、その言葉通り、別に動物が苦手というわけではない。触るのも撫でるのも飛びつかれるのも問題ないが、表に出さないだけでその時もあまり機嫌がよろしくないそうだ。

「圭介、帰り道に動物に触ったんじゃない？ お父さん、昔からそういうのはすごく敏感なんだから」

料理を運びながら母がいう。帰宅は一時間以上前になるのだが、それでも嗅ぎ分けるのだろうか。恐ろしい嗅覚だ、最早犬ではないだろうか。

「それじゃあ、いただきます」

「いただきます」

父の言葉に、母と二人で続く。いつも通りの食卓だ。

取り敢えず動物の話題も禁句なので、トラの話はうまく隠しながら、必要なことを聞いていくことにした。

「そういえば父さん。この町で、潮の香りがするところって分かる？」

「潮の香りい？ どうしたんだ急に」

「いやあ、友達にそんな話聞いてさ。なんか気になっちゃって」

何をどう聞いたのかを問われると困ったところだが、父はすんなりと納得してくれたよ

うだ。

「ふうん、そうか。とは言っても、この辺りで潮の香りと言われてもなあ。なあ、母さん」
「そうねえ。ここは内陸だし、いくらお父さんでもその臭いは嗅げないと思うけど」

最後の一言はおいておくとして、確かにここは内陸だから、潮の香りは難しい。トラの話で一番引つかかっていたのはそこなのだ。

「ふうむ……確かに磯臭い香りを嗅いだ記憶があるのだが、これも気のせいなのだろうか」
トラが一匹で考え込んでいる。トラ自身もその記憶を訝しんでいたのだろうか。

磯臭い、と言われても、海が近くにないのだから、それも難しい。河はあるが、その臭いではないだろう。隣の町まで行けば海も無くはないが、トラ曰く、この町に住んでいたことは間違いないとのことである。

小さい町であるし、それほど探す場所も多くはないだろうが、そもそもトラが死んでからどれぐらいの時間が経っているのか分からない以上、その家自体が残っているかどうかも疑問だ。

「ともかく、この辺で潮の香りはないと思うぞ」

「そっか。ありがとう、父さん」

となれば、あとは頼れるのは自分の脚だけだ。トラを引き連れて、町中を探してみるより他にない。幸いなことに、もうすぐ春休みだ。時間はいくらでもある。

夕食を終えて自室に戻ると、トラにそのことを伝えることにした。

「……というわけで、時間は掛かるけど、明日から少しずつ探してみよう。まだ何日か学校はあるけど、春休みに入ればいくらでも時間は作れるさ」

「すまない、恩に着るぞ、圭介」

トラは机の上に座り込み、雨雲の去った月夜を眺めている。

「……昔は主人の膝の上で、こうやって月夜を眺めたものだ。吾輩が生きていた頃はもう少し広い景色で見えていたものだが、それでも月の美しさだけは何があっても変わらん」
月を眺めながら、物思いに耽るトラ。今更だが、猫の一人称が『吾輩』であることに妙な違和感がある。彼の文豪の想像も、あながち舐められたものではないらしい。

とにかく、明日からは放課後の僅かな時間だが、少しずつ町を見て回ることにする。ほんの些細なことでも、もしかしたらトラが思い出すきっかけになるかもしれない。

「ところで、そろそろノートの上からどいてくれないか？ 宿題ができないんだけど」



「圭介ー！ 放課後のゲームセンター漁りに行こうぜー！」

この場に教師がいれば卒倒しかねない宣言をする一也。相変わらずの空気の読め無さだが、このクラスでは最早定番になりつつある。ちなみにツツコミ役である瑞希は別のクラ

スなのでここにはいない。

いつもなら一也の誘いに一も二もなく乗るのだが、今日は大切な用事がある。

「すまん、一也。今日は用事があるんだ。また今度な」

「ええー、つまんないよー。まあそう言うことならしょうがないけどさ」

あつさりと引き下がる一也。空気は読まないが、こういう配慮はきちんと出来る子なのだ。

一也に謝りながら教室を後にする。昨日の雨が嘘だと思ってくらいの気持ちいい晴天だ。歩き回って情報を稼ぐには丁度良い。

「……良かったのか？ お主の学友であろう？」

鞆から顔を出してそう言うトラ。気分的にすり抜ける、ということをしたくないとのことなので、こうやって鞆のチャックを中途半端なところで空けている。

「良いんだよ。あいつとはいつでも遊べるからな。それに、早くお前の飼い主探してやらないと、向こうもお前のこと探してるかもしれないからな」

見えるかどうかは分からないが、とは言わない。トラにとっては、主人を一目見るだけでもいいとのことである。見られるかどうかはいいとしても、会えるかどうかを話すべきではない。

「まずは隣の近くに行ってみよう。潮の香りがするかもしれない」

今のところ手元にある情報で、明確に場所を示すのはそれぐらいである。それを基準に探していくことにする。

「うむ、では宜しく頼む」

トラは大人しく、鞆の中から辺りを見渡しだした。少しでも手がかりが見つかればいいのだが。

放課後から一時間と少し、夕飯の前まで町を歩き回ったが、結局何も見つからなかった。収穫らしい収穫も得られないまま、とにかく探す場所を絞れただけでもよしとしようとして路に就いたのがついさつきである。

「隣町に近いのは、あそこだけか？」

「いや、まだもう少しあるよ。ただ、あの距離で潮の香りがしなかったんじゃ、隣町近くって考え方自体が間違ってるのかも」

とはいえ、まだ初日である。町中探して回れば、もしかしたらトラの家も残っているかも知れない。その一縷の望みにかけて、明日以降も探し回る他はないだろう。



それから数日間、隣町近辺を中心に町の中を歩き回るが、如何せん時間は短い。探索できる場所も限られている。

春休みまであと数日だ。そうすれば、探す時間も増えるだろう。今日も今日とて、放課後の時間で探すしか方法はないのだ。

「圭介、今日も用事か？」

いつも通りの一也からの誘いである。なのだが、今日はどうも様子がおかしい。いつもなら無駄に騒いでいるのが、今日に限っては静かだ。

「すまん、暫くはかかる用事なんだ」

「それって、どんな用なんだ？」

いつもなら引き下がってくれるはずの一也だが、その日に限っては食い下がってきた。顔にもいつもの明るさはない。一体どうしたのだろうか。

「えっと……そんなに大した用事でもないけどさ」

「じゃあ、なんで毎日毎日放課後に町中歩き回ってるんだ？」

一也から出てきた言葉は、質問というよりも詰問に近かった。きっと誰か他の生徒から聞いたのだろう。流石に町中に出没して、誰かに見つからないわけがなかった。

「何か捜し物か？ 一体何をしてるのかぐらい教えてくれよ」

一也の、こんなに真面目な顔は久しぶりだった。いつもは巫山戯たような空気を出す一也も、色々と考え込んで、ため込んでいるのだろう。

それでも、言ったところで信じてもらえないはずもない。死んだ猫が見えるとか、その飼い主を捜してるとか、言葉にしてもきつと伝わらない。

「……捜し物は捜し物だ。けど、それ以上はちよつと——」

言うが早い、一也は肩を掴んできた。それは責めるというよりは縋り付くような強さだった。顔は伏せていて見えないが、手の震えが、指の強さが、一也の悩みを伝えてくる。

「それ以上は言えないのか？ それは、瑞希や俺に対しても、なのか？」

口が、上手く動かない。一也の気持ち、悩みが、どんな重さなのかを、俺は果たして知ることができているのだろうか。この手の震えも、声のトーンも、何もかもを、聞いて感じているだけで、推し量れてはいないのではないか。

答えに窮する俺の態度を、答えなのだと感じたのか、一也の手は肩から離れ、上げた顔には力無い笑顔だけが張り付いていた。

「……そうか。そうだよな、言いたくないこともあるよな」

「違っ……」

「いい、大丈夫だ。話せるときでいいよ。それじゃ、捜し物頑張れよ！」

最後にはいつもの一也に戻って、教室から出て行った。それが、見栄や強がりだと、俺に悟られると知っていながら。

「……ごめん、トラ。今日は探すの、ちよつと休憩して良いか？」

鞆から顔を出していたトラに声を掛ける。トラは声もなくうなずき、俺の我が俣を許してくれた。



夕飯のあと、俺はベッドに寝転がったまま、起き上がる気力ももてなかった。というのも、先程瑞希から掛かってきた電話の内容が原因だった。

『お兄ちゃん、元気がないみたいなの。でね、学校であつた話はお兄ちゃんから聞いたよ。あのね、これは私たちの我が俣かも知れないけど、もし良かったら、全部終わった後でもいいから話してくれないかな。何があつたのか話してくれば、きつとお兄ちゃんも納得すると思うから。……そしたら、また、三人で馬鹿な話をして笑ったりできるよね?』

絶縁をしたわけでもない。罵詈雑言をぶつけたわけでもない。それでも、それよりも尚酷いことをしたのだ。

二人は本当に俺のことを心配している。それなのに、俺は何も返せなかった。あの二人を裏切るようなことをしてしまったのだ。

気力もないまま寝転がっていると、不意にトラが枕元にやってきた。

「……圭介よ、聞いてくれるか」

「……ああ」

トラからの問いかけも、まともに答えられない。それでも良いと、トラは話を続ける。

「圭介、お主には感謝しておる。吾輩のような素性も知らぬ幽霊の我が俣に、こうして付き合ってくれておるのだから。だが、もしこのままお主に負担をかけ続けるのであれば、吾輩のことなど捨て置いてくれて構わぬのだぞ?」

トラは、あくまで優しく、それがどんな意味を持つのかも分かりながら、それでも俺のことを案じて提案してくれている。

「お主にはお主の生活があり、繋がりがあ、営みがある。それを余人である吾輩が滅茶苦茶にしてしまうのは、どうあつても耐えられんのだ。お主が吾輩との約束を反故にしたくないという気持ちも有難い。だがな、吾輩よりも、あの一也と申す者や、先程の電話口の女史をこそ大切にしたい。何時消えるとも知れぬこの身を顧みるなど別段重要でもなからう。何れは絶たれる縁だ。今切れたならば、お主も吾輩も傷は浅くて済もう」

姿を見て、声を聞ける人間など、そう多くはないはずだ。そうして見付けることのできた俺であるにも関わらず、トラは自らではなく、あくまで俺を慮って口にする。

一体何をしているのか。心配を掛けて、気まで使わせて、まだ為し遂げていないことがあるにも関わらず、こんなことではいけない。

体を気力だけで起こすと、頬を叩く。古典的だが、無理矢理起こすならこれほど効果的な物もないはずだ。

「ど、どうしたのだ、圭介」

突然の奇行に驚くトラ。だがそんなことは気にも掛けず、二度三度と頬を叩く。

「……このままじゃ駄目だ。なんにも出来なくなるだろ」

静かに、それでも確かに自分に言い聞かせる。やるべき事はある。やれる気力もある。ならば、あとは為せば成るのだ。

「大丈夫だ、トラ。どっちもうまくいく。いかせてみせる」

「圭介……」

「お前との縁は確かにまだ日が浅い。あいつ等とは本当に小さい頃からの仲だからな。それでも、お前との繋がりも大切なんだ。だから、こんなところで終わりになんてしてたまるかよ」

トラをしっかりと見据える。心配するような表情なのだろうが、人の顔ほど分かりやすくはない。そもそも猫とそれほど接してこなかった自分には、猫の表情の違いは分からないのだ。

いつか、それでも分かるようになりたい。彼の表情を、言葉が無くとも分かってやりたい。

「まかせとけよ。お前の飼い主は、俺が絶対に見付けてやる」

それは俺とトラが出会って最初に交わした、二人の絆なのだ。これだけは、決して反故になんてしない。



「それで、改まって話って何だよ？」

翌日、一也と瑞希を呼び出した。勿論、これまでのことを謝る為だ。

どんなことがあっても、この二人のことだけは信頼している。それは誓って本当だ。ただ、それを示すことが出来なかった。だから、これはそのけじめなのだ。

「二人とも、ごめん。俺のこと心配してくれてなのに、そういうこと考えもせず……」

「……気にするなよ。お前が何抱えてるかわからないけどさ、俺たち二人とも、お前が話せるタイミングを待つからさ」

そういう一也と、微笑みながら肯く瑞希。結局俺は、今まで二人の優しさに支えられてきたのだ。だからこそ、感謝している。

そして、だからこそ、話しておきたいこともある。

「その、タイミングなんだけどさ……」

「ここに……猫が？」

「名前はトラだ」

これまでの経緯を話し、何を探していたかも伝えた後、そういつて鞆の隙間を見せた。俺にはきちんと顔を出すトラが見えているが、この二人にはきつと見えていないだろう。

トラはこのことに反対していた。どうせ信じてはくれないだろう、と。それでも、俺は二人なら信じてくれると確信できた。

二人はお互いに顔を見合わせながら、何も見えていないはずの鞆の隙間を凝視する。トラも柄にもなく緊張しているのか、固まったまま二人の視線を受け止めている。

少しの逡巡の後、二人は意を決したように背き合うと、こちらに向き直って口を開いた。
「よし、じゃあ俺たちも手伝うよ」

「自分が亡くなってもまだ探してるんだもんね。人手は多い方がきつと早く見つかるよ」
そう言って、瑞希は見えていないのに、トラを撫でるような仕草をする。少し位置はズレているが、それでも心地が良いのか、トラの顔が緊張から弛んでいく。

「にしても、三大家族で、広い家で、それに潮の香りっただけじゃあ、ちよつと情報が少ないな。せめて何年前なのかとか名前は何かとか分かれば違うんだけどなあ」

一也も心当たりはないようだ。確かに、情報が少ないからこそ脚で探すという方法をとったわけだが。

「ねえ、その潮の香りだけどき、魚屋さんとかは？魚の臭いを潮の香りと勘違いしたとか」
「……なるほど」

ずっと海に近いところばかりを探してきたが、もしそうならもう少し内陸であっても違和感はない。

「でも、そんな魚屋さんって、この辺にあったか？」

「今はないけど、昔はあったんじゃないかな。隣町は海があるし、大昔にしても、魚を運ぶなら丁度良い河もあるしさ」

そこまで昔にまで遡ってしまうと、飼い主も家も探すのは不可能になってしまうが、魚屋の線はあるかもしれない。

「となると魚屋か……。と言われても、そんなもの探し回ると切りがない。もう少し分かりやすいものはないかな」

とにかく、可能性はこの町全域であり得るのだ。絞れるのなら絞らなければ、町中走り回ることになるだろう。元々はそのつもりだったが、情報が出てきそうな今なら、もしかしら絞り込めるかもしれない。

「……そういえば、大きい家に一つ、心当たりがあるんだけど」
そう言いだしたのは、一也だった。

「え？ どこどこ？」

瑞希が食いつく。今は少しでも情報が欲しいのだ。

「いいか、巫山戯てるわけじゃないぞ。……俺が前に話した、幽霊がでるってお屋敷。あそこ結構広いし、昔からあるって言うんだよ。トラの飼い主の家じゃないにしても、もしかしたら、トラにも見覚えがあるかも知れない」

「でもそれって、町の外れって言ってなかった？ そんなところ、歩いていけるの？ 言っておくけど、私自転車ないよ？」

「俺だつてないよ。けど、バスとか乗り継げばいけるんじゃないかな」

思い思いに案を口にする二人。だがバスを乗り継ぐにしても、それだけお金がかかる。出来れば出費は抑えたいのだが。

「……あ」

「どうした？」

「父さんに頼んで、車出してもらえないかな。遠いところなら、頼み込んだらいけるかも」
「採用。俺も一緒に頼みにいくから、それでいこう」

瑞希が心配している様子だが、休日返上で、どうにか動いてもらえないか頼み込んでみよう。トラは相変わらずこちらの様子を見て、微笑むような表情をしていた。



二日後。父の運転する車で、俺たち三人と一匹は、噂の屋敷へ向かっていた。

授業の調べ物の為に車を借りたい、と頼み込むとあっさり了承してくれた。こういう時の瑞希の機転は助かる。しかしながら、休日返上は流石に難しいらしく、夜は遅いが夕飯の後の午後八時、街灯と家の明かりが照らす住宅街を、父の車で走って向かう形となった。

「しかし、一体何を調べに行くんだ？」

「え、えと……そう！ 実際の日本家屋を見に行こうと思いまして！」

「そ、そうそう、こういうのは実際建ってる物を見て感じないと意味無いしね！」

三人でどうにか父を誤魔化しつつ、道案内をしていく。直前まで噂の屋敷の場所が分からないとあって、父も詳しい場所は知らないのだ。

「いいけど。……というか、なんか車の中が動物臭くないか？ 気のせいかな……」

相変わらず鼻が効くようだ。一度やられた俺とトラは何とか誤魔化したが、二人は慣れていなかったため、びくりと体を震わせていた。

一也の道案内で車を走らせていく内、父の様子が少しおかしくなる。車を運転する姿は普通だが、どこか落ち着かない雰囲気だ。

「……どうしたの、父さん？」

「いや、なんでもないよ。多分気のせいだ」

そんなことを言う父は、一也のナビゲートにしたがって、徐々に郊外へと向かっていく。雑木林の横を走りながら、見慣れない景色も漸く終着点へとやってきた。

木々に囲まれ、建物もまばらな場所に、月明かりだけで明るく照らされた場所。そこに佇んでいたのは、既にガタがきて今にも崩れそうな、一件の大きな日本家屋だった。

住人もおらず、庭も管理がほとんどできていない。打ち棄てられた廃墟のような場所で、一也のナビゲートは終わりを告げた。

車を降りる四人。一番最初に反応したのは、他でもない父だった。

「……ここは」

「え？」

「ここは、昔父さんが住んでた家だ。間違いない」

そう言って、門を懐かしむようにさする父。

「この辺も、昔は賑やかだったんだ。いろんな店が売りに来たり、親父の知り合いが来ては宴会を開いたり。それなりに裕福だったからな。わざわざ買に行かなくても、向こうから売りにきたんだよ」

それでも、不景気の煽りを受け、父はこの家を泣く泣く売り払ったのだという。思い出の詰まったこの家を手放す寂しさは、果たしてどんなものであっただろうか。

その時、鞆の中にいたトラが、隙間から抜け出して家の中へと走り去って行ってしまった。

「トラ！」

思わずそう呼んでしまってから、しまった、と思った。一也と瑞希は事情を知っている。だが、父には何も話していない。ここで名前を呼んでしまったのは失敗だった。

事情を話さなければいけない、そう思って父を見ると、先程よりも尚驚いた顔をしてこちらを見ていた。

「トラ？ 今、お前トラと言ったか？」

「……トラを、知ってるの？」

そう聞くが早い、父はまるでトラを追いかけるように駆けだしていた。

「父さん！」

「圭介、俺たちも行こう」

一也に促され、俺たち三人も続いて屋敷の中に入っていった。

中は見た目と同じく、年月を経て老化していた。腐りかけの床板、穴の空いた廊下、崩れ落ちた漆喰。それでも、未だその形を保ち続けているのは、或いは誰かの意思が息づいているからかも知れない。

「圭介の親父さんも見当たらないし、トラは元々俺たちには見えないし。なあ圭介、一体何処に行けば——」

何処に行けばいいかは、俺には分かる。きっとトラが一番思い入れのある場所。かつて

の主人と共に過ごした場所。

——昔は主人の膝の上で、こうやって月夜を眺めたものだ——

あいつが言っていた。きっとそれは、この屋敷で一番開けた場所だ。

穴の空いた箇所を気を付けながら、縁側を走っていく。狭い場所で全力疾走は出来ないが、それでも彼らを探すには十分だった。

開けた広間、雑木の隙間から月が覗くその場所に、トラと父がいた。

父にトラは見えていないはずなのだが、それでも父はトラに語り掛けるように、その場にいと確信して話していた。

「なあ、トラ。私は、何故お前がいなくなったのか分からなかった。親父はあんなにも君を可愛がっていたのに、どうして出て行ってしまったんだ、と。でも君はずっと、親父を——主人を捜し続けていたんだな」

「吾輩は、ずっと後悔しておりました。主人にまともに別れの言葉も告げられぬままこの世を去ったことを。捨て猫だった吾輩を、彼は我が子のように愛してくれた。その恩義を、その寵愛を、吾輩は終ぞ返すことが出来ませんでした」

互いの、届くはずのない独白は続く。事故のせいでいなくなってしまったこと。飼い主である俺の祖父は、必死で探していたこと。その無理が祟り、倒れてしまったこと。そんな風に自分の父親を追い込んだトラを、父は何時までも忘れられなかったこと。

父が動物を嫌っていたのは、懐かないと口うるさく言っていたのは、きっとトラに対する勘違いからだったのだろう。だから、本当は父も動物を好きでいたのに、可愛がることをしなかったのだ。

そんな独白がいくらか交わされた後、妙な風が屋敷の奥の方から流れてきた。それは冷たい物ではなく、まるで温かく包み込むような、そんな風だった。

『……トラ……俊彦』

風に乗せられて、そんな声が聞こえてきた。呼ばれた一人と一匹は、声のする屋敷の奥へと振り向いた。

そこにいたのは、長着を着た老人だった。時代錯誤な彼の格好は、しかし、彼とトラの時代ではごく当たり前の服装だったに違いない。



「……親父」

「……主殿」

父とトラは、同時に言葉を紡いだ。それは、三人が三人共に望んでやまなかつた久しい再会に他ならなかつた。

『嗚呼、懐かしいな。昔はこの部屋で、三人で月見をしたものだ』

「親父、ごめんよ。親父が信じてたトラを、私は信じてやれなかつた。本当に親不孝なのは、他の誰でもない、私だつたよ……」

泣き崩れる父。祖父との再会に、自らの責を省みずにはいられなかつたのか。

「主殿。この命落としてから幾年月、貴方のことを思わなかつた日などありませんでした。貴方にもう一度会い、謝りたかつたのです。この身の身勝手手を、先立つたこの不幸を。どうか、どうかもう一度……そう願わずには、おられませんでした」

自らの主人を見上げるトラ。積もり積もつた思いを、吐き出さずにはいられないのだから。

二人は揃つて祖父への思いを告げた。その思いを受け止めた祖父は、優しく、まるで日溜まりを思わせるような笑みを浮かべ、その手で二人を抱きしめた。

『もう何も言わなくてもいい。お前達の気持ちは、きちんと私に伝わつたよ』

「それだけ言うと、傍らのトラを抱きかかえた。その視線は、次にこちらに向けられた。『ありがとう、この仔を連れてきてくれて。君たちのおかげで、叶わないと思つていた再会を果たすことが出来た。本当に、ありがとう』

優しい、どこまでも穏やかな声で、そう告げた。

「トラ……」

「圭介、お主の気持ちだが、吾輩と、お主の父をここへ導いてくれた。これまでの数日間、実に忙しなかつたが充実した日々であつた。本当に有難う」

彼らは、そろつて礼を述べた。そうして、伝えるべき事は伝え終えたと言うかのように、体は徐々に色を失い、輪郭はぼやけていく。

「親父……トラ……本当に、本当に——」

『もうよい、俊彦。もう、自分を責めることはないのだ』

祖父はそう言つて、崩れる父の頭にそつと手を添える。その手も徐々に透けていき、祖父とトラは、ゆっくり、ゆっくり消えていく。

「……ありがとう、親父」

必死に絞り出すような吐露に、祖父は微笑むと、トラと共に、この世から消えていった。自分たちがいたことなど、まるで夢だつたというかのように。



春休みも中盤、そろそろ時間のサイクルも戻さなければと焦り出す頃、俺たち三人は、再び屋敷を訪れていた。

引き取り手がおらず、打ち棄てられたままとなっているその屋敷は、既に取り壊しが決まっていた。それを父が知ったときも、穏やかに「そうか」というだけだった。

瑞希が門の前に花束を二つおき、三人で静かに手を合わせる。彼らの事を祈って。

「ところで、親父さんの様子はどうだ？」

そう一也が聞いてきたのは、帰り道のことだった。

「どうって言われてもな。元気は元気だけど、昔の動物好きが再燃しちゃったせいで、動物飼おう、動物飼おうって毎日言ってるさ。どうせ世話するのは母さんだから、二人でいっつも言い合ってるよ」

これ以上仕事を増やすな、の一言で何時も引き下がる父だが、その度に残念そうに「動物、動物……」と呟いている姿は何度見ても面白い、もとい物悲しい。

「よっぽど、トラやお爺さんのことを気に掛けていらっしやったのね。もしかしたら、あんなことがなかったら、圭介のお父さん、何時までも自分を責めてたのかも」

瑞希の言葉に、俺も肯く。きつと父はずっと自分を責め続けていたのだろう。それを解放してあげられたのも、トラと出会えたからではないだろうか。

有難う、と何度も言っていたトラ。本当にお礼を言いたいのは、他でもない俺だったというのに。

——ありがとう。俺たちを救ってくれて。

雨の中に沈むあの猫の姿を、俺は絶対に忘れない。その姿を見られたのも、声を聞くことが出来たのも、きつと運命だったのだ。

空を仰ぎ見る。きつとどこかにいる祖父とトラがどうか安らかに眠れることを祈りながら。